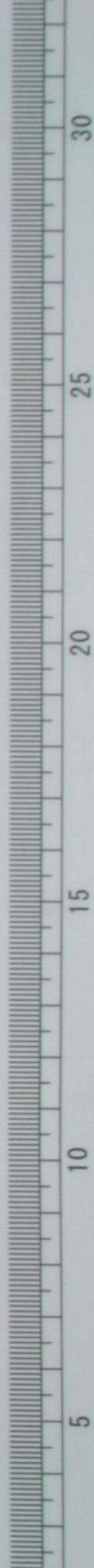
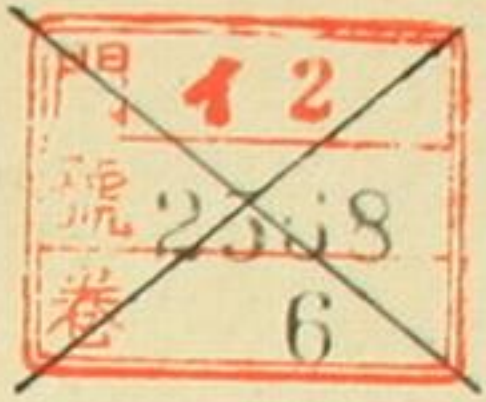


東壁又續錄

坤

特別  
14  
1919  
671





671

東壁又續記仲告 十一月廿九日



○山村より書かす其の不存の経冊ニる数十枚  
を辨つに、五枚と出来家原に据りぬり  
洋紙に云々、先人の存るを云々云々云々  
云々、ニる数十枚の経冊の由る故紙の上  
に云々、真淵と契沖の淵を云々云々  
云々云々。

経冊を獲れり云々一冊の下等本を得に、云々と  
於る門人經云々云々の自書本あり、十行罪

十九年四月五日  
市島謙吉氏

紙二十枚を綴つた冊子である。如く、夏の中  
開き終つてそのか、つ人の趣針、四角九十二人、  
法右二門正徳、如く、三浦内張あひ終つて  
その出多地、如く、記してあるが、氏名  
の上二軍一團、如く、二團三團とす、如く、所し  
て、如く、如く、い、如く、如く、如く、如く、  
の等、如く、如く、如く、如く、如く、如く、  
が、如く、如く、如く、如く、如く、如く、  
と、如く、如く、如く、如く、如く、如く、  
あ、如く、如く、如く、如く、如く、如く、  
○一、如く、如く、如く、如く、如く、如く、

お、如く、如く、如く、如く、如く、如く、  
り、如く、如く、如く、如く、如く、如く、  
た、如く、如く、如く、如く、如く、如く、  
二、如く、如く、如く、如く、如く、如く、  
而、如く、如く、如く、如く、如く、如く、

杜洲村石倉の

茶衣掛古桶

中津及二の古

あ、如く、如く、如く、

と、如く、如く、如く、

及、如く、如く、如く、

例、如く、如く、如く、

えんむちのうら雨多うい

古方本

やまを物修

善尾入大田石階不致のちを修更け  
脛をさるるを記す也

文政六年二月廿二日借此不吉武州

品川旅泊之中仁太田左妻の太夫入石

道灌本也以日限寄之

里川真道花

大文考の内

犬に龍傷者 二十餘通

えんむちのうら雨多うい  
念しと犬に龍をえ油を上げてとて各  
所ゆゑの傷者も龍の子母法を  
多しと記しあもえもるを同じし  
ことまきと記すれりしき意味を以  
てゆけり公方の言犬を入るし物と  
傳出せむなるらん歎

唐開えん

一尺五寸

二個

正公院御物の物修

持の木を以て作る

今のは比してんはねを粗毛  
ふんくもふんくはねのまは物  
の字もやきこふ

毒丸又のり持り書

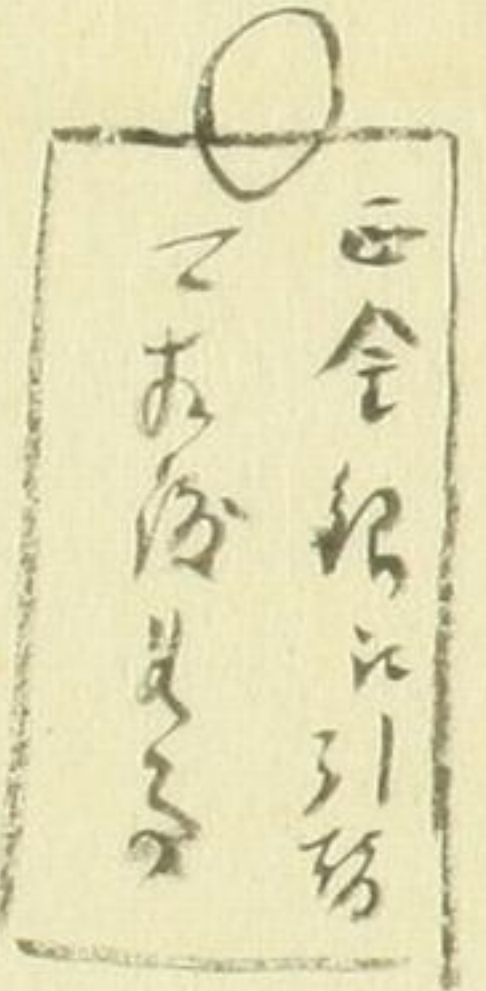
無毒時代の毒丸 表干

北の海〜〜〜

仙臺の海〜〜〜  
厚紙の表面を墨くうくと

紙の海と記し

雁の海を防く為手取



とよめる風出〜〜〜  
し割印を捺す

市村鑽印〜〜〜  
此の毒丸毒丸割り  
二枚を踏む

支那の海〜〜〜  
折個の他地味をツハニ  
百子園の大古里を  
出しし手取り

東宮有之 存望由之 以由釣一 柱明和  
黒川其邊 市打獲乃乃 永井一 存 萬地  
其地又乃乃 余乃他 二 三 之 乃

○本巻の冒頭は揚子江をさるる……川村五  
 郎の墓の名義を葬舟に記し余の采女  
 の傳……ある事や伊豆の傳舟舟村  
 名義をその人の後を葬舟中の自平  
 きき代を傳り……也、左の傳舟  
 日と少傳を所する……傳舟  
 事……也、左の傳舟  
 ……の傳舟舟村  
 ……の傳舟舟村  
 ……の傳舟舟村  
 ……の傳舟舟村

△ 人名ト……人々……  
 △ 國子方……

有 卿

布衣健飛春庭、男、肥州家弓、技師、文、  
 叙、文、ヲ、以、テ、一、家、リ、カ、ス、文、政、ヲ、死、シ、六、十、二、  
 年、前、に、没、ス、

建 心

奉、元、年、本、後、美、唐、と、云、ふ、大、平、の、名、臣、也、  
 三、十、前、に、没、ス、

永 平

本、居、橋、ト、云、大、平、ノ、子、内、卷、ノ、美、臣、ト、リ、シ、メ、  
 早、由、

小 ち

大、平、ノ、女、内、卷、ノ、女、本、居、豊、額、ノ、母、賢、夫、人、

躬 信

安、田、二、庵、真、剛、門、下、信、者、也、友、人、  
 万、葉、集、解、作、者、也、田、妻、子、傳、二、也、

自 寛

三、島、寺、兵、工、あ、り、見、  
 万、葉、集、解、作、者、也、

△

△

△

△

景 栢  
香川景栢後、黄平ト改ム徳大寺宗深其  
景栢、而ウチ景栢リ表合ムル

景 栢  
香川長門守桂園ト号ス [人名] 表ハ略ス

景 栢  
景栢ノ甲  
中短冊 栢ニリ以テ景ニ号ス

忠 友  
保井田忠友 平田葛丸ニ号シ景栢ト号ス  
文字款共栢ニ号ス [人名]

長 伯  
有家ハ叔ノ名号リ而シテ長隣ト号ス

長 因  
名ハトシ角 華海ニ号ス  
長伯ノ子

長 収  
有智寺中興 長因ノ子

長 基  
長収ノ子

澄 月  
僧澄月 [人名]

意 延  
僧大愚 意延ト号ス [人名]

雄 凡  
雄凡 賀茂系ノ人  
千禧ナリ

道 元  
成島因重 道元 [人名]

成島宗ハモト幕府ノ一府主ナリカ  
道元 筆ヲ傳臣トシ  
國字 漢字ナリ以テ在リ 道元 筆ヲ以テ在リ 同ノ元祖ト号ス

平安四天王  
盧菴  
澄月  
意延  
高深

改正  
史稿集覽  
卷十九册  
百の五  
貞記



和長 道筑子

又晴雄ト云 加井子

司直 岩谷子

良遠 司直子 柳井文

方道 三井新五郎 現今三井土屋の内 子よ子婦人ノ祖之リ

車雄 贈正四位 三井氏ノ子

光永 伴林光平 贈正四位 尺名

中庸

股部中庸 京都ノ医師 宣長一名光平 三大老ノ作者

高方

藤井高方 宣長ノ大家

法平

加納諸平 布居門外ノ歌人 海上嵐平ノ師

冬照

橋冬照 守部ノ男

久守

久老男

久志

加茂真岡ノ子 伊世本由氏

〇〇

御杖

富士若御杖

因

△

1

お殿

〇〇

尊相

尊相記云、又、此字出、詳、因  
度長元年、栗云

〇〇

御爪

河田御爪

字子玄、通、東、  
末、麻呂、孫、右、稀、品、ト、ス

△

〇〇

宗因

萩原宗因、百花園ト、ス

保己、  
命、公、羽、オ、ノ、師

△

〇〇

保己

保己、  
代、保、己、  
夫人ノ、代、  
代、保、己、  
夫人ノ、代、  
保己、  
男、忠、室、ノ、  
三、名、ノ、  
以、テ、  
孫、ト、ス

△

〇〇

茂河

横田氏宗因、門後、  
保己、  
ト、ス

△

保己

保己

〇〇 言道 大隈結道 新流ノ元祖 暖造ト肩也 梅也ラレシ

〇〇 暖造 佐々木位 紹天 國忠 評論ニ詳ナリ

〇〇 野丁 安藤野丁 万葉集ニテ 奇行ノ人 貴政ノ人

〇〇 雅嘉 藤原 尾崎氏 朝云ノ系作

〇〇 雨岡 吉田松樹 幕府作事方 吾妻の傍り 翠ノ人 因

〇〇 了河 一枚堂 村田了河

〇〇 義言 中野義言 何井家 儒臣 因名ニ詳ナリ

〇〇 義門 玄妙寺 我門 春庭門 山口 翠若夫 語学ノ元祖

〇〇 土満 栗田 志岐守 真岡門 後宣 卷ノ終リ

〇〇 信美 羽倉 仁義 荷田 東九 在治

〇〇 道敏 梅井 一室 平安 四天皇ノ友人

〇

廣落

鬼島田廣陰 語子一説了開人

△

〇

通光

法水通光

△

〇

縫子

紅屋縫子 真洞門才一也流門人ノ海民ヲ請カシテ

此ヤシテ

△

〇

光勢

村田夕也子 春海ノ女

△

〇

大徳

僧大徳 真洞門

△

〇

良悲法親王

人名字主ニ詳ナリ

△

〇

資枝

日野徑一位 孝居宣長子位シタリ宣長四條宿願

園

〇

資爰

日比佐一位 資枝ノ弟

月

〇

蓮河

僧蓮河

△

〇

吾鬘

遠山

△

〇

歌城

小林歌城 山北安政江戶名士一人

△

〇

市淑

小川市淑 江戶名士一人

△

義標

高木義標  
井上文雅川人

安政年曾江三戸多野人

△

鍾浚

教儀

于安倉屋ノ事ノ

△

春路

村田、春海孫

△

般不根

清意

富山匠之 旧幕人 春内時代

淋蔭

清水源匠人

△

千古

一柳千古 千蔭ノ十哲

△

芝良

向宮、千蔭ノ十哲

△

廣海

大江原、千蔭ノ十哲 後京都ノ出テ

△

植万

海理幸典 後出テ弘賢 与信時代ノ事

△

心路

植村金平、与信ノ

△

○ 克房

古水後臣ノ男

△

○ 利和

利和 日向守 藤元 千益十哲

△

○ 千幹

千幹 白木、千益ノ子

△

、 信説

○ 敏成

江戸 老田侯ノ臣 千益十哲

△

○ 東平

用新 東平 即日隆 西村人 友入 日記記あり

△

、 延平

○ 級巻

六樹園ト稱シ 南畝ト稱シ 互チ人 因

因

○ 翠一

太田翠一 南畝

因

、 清忠

、 清之

、 昌順

正韶

尾州守長短冊ノウラヒアリ



正典

久貝因持守幕在藤下  
安政年間大家



新富

山中詩返位天白詩ノ傳子先

子亮

同主永好有石山田子信つ

賢胤

估氏依

政雄

本尾の人孫アリ



雅言

植松少将雅言ノ孫ノ殿上人



真柱

五臺院ノ麓州一院ノ取人子若故人



三重麻呂

銘本ノ一

郁子

満子

隆世信師ノ弟  
千九八

信之

吉田義夫 十田孝士 吉田元一 孫人

△

貞枝

大村貞枝

△

正爪

三崎正爪

△

信之

伊能 久米幹文 子ノ師

△

顯忠

伴田

△

清五

御巫、一、中、一、行幸の修贖位アリシ人  
伊能、一、吉田、一、

△

景嗣

香川 黄中 養子 景祐ノ弟也

△

斐雄

桂園 土壘 弟也

△

比成

比成 日 比山

△

真子

真子 日 均山

△

希言

希言 桂

△

良海

良海 桂

△



〇〇

垂之

曾

柱園十堦



〇〇

直之

能谷

柱園十堦



〇

公

柱

流傳之屬

〇

有

藏

〇

辰

以

九山

〇

三

羽

柱園十堦



〇

正

覺

〇

水

牧

草野

〇

久

保

山田、仁州人、也

〇

繁

之

能代

也

〇

秀

作

名田秀雄、也

○ 升 甘万 同宗一郎 山田三乃

○ 盛 素 松原一 山田三乃

○ 容 空 盛三郎 山田三乃

○ 光 投 清光投 大村一

○ 嘉 言 村田春門 男

○ 春 吟 村田春門 男

○ 久 足 △

○ 冬 胤

○ 日 美

○ 子 屯 △

○ 常 久

○ 芳 久 △

正  
息

正  
之

之  
義

在  
席

之  
法

之  
秋

重  
息

重  
息

〇 旬 信

植松方任危地しんかたつうてしちふ

〇 茂 志

日、、者任ノ子

〇 安 守

扇打安守 ちたつ 馬琴ハハ人トヨ 国子4位向

〇 尊 疎

千島言福ノ社又ちたつ

〇 石 柵

上田、、五人 ちたつちふ

〇 千 株

梅井多林 植井持士 寺ハハ人ノ 血流るゝと云  
是此人ちたつちふ

○ 長 廣

古橋、一、京人多之つる、其地

○ 彦 磨

事多之れまより、其居の古事

○ 元 貞

○ 山 房

多田下、一、甲ある

○ 高 門

大館、一、古事の下事

○ 茂 濟

大坂ノ殿、古事の  
其地多之れまより、其居の古事

○ 常 忠

○ 真 幸

長川、一、古事の古事  
古川古事地、古事

○ 春 門

村田春門、古事の古事  
古事あり、若くは多之れまより、其居の古事

○ 信 雅

○ 福 彦

古事の福彦、古事

○ 子 祐

城戸千幡、古事の古事  
古事あり、若くは多之れまより、其居の古事

子 七

廣 伴

行 松

廣 待

廣 道

方 朗

七栗廣伴 本居門 吉野人

蘇重夜區 本居門 陽武秋 不し古考あり

久 足

十津久足 何野松山人 本居門

方 朗

方林方朗 吉野人 本居門

美 石

中山美石 吉野人 本居門

八 徳

流石の 吉野人

光 秋

土岐光秋 本居門

廣 足

中富廣足 太平の 吉野人 徳孝あり

○ 松 彦

△

○ 務

小野 務 中居つ 評史 家とて名アリ

△

○ 碓

三物 久らう 崎 漢夫 老年に至り 歌りよき 名人トナリし人  
伊豆 碓 丸トナリ 世に名あり

△

○ 大 秀

碓 原 久 山久 田中、中居つ一流

△

此書東照宮より元徳に賜はる本

石林遊記

二冊

明正徳政

巻尾

園光寺帯

元徳花押

あり又

各巻尾

元徳花押

敬復書

の二字と刻りし印を  
持し



標題 書体 又元佐自筆  
元佐の書と云聖又統録の上巻に掲げ  
又左の山光寺傳後略傳中  
宗稜の傳と物出す

圓光寺傳統略譜

瑞巖山圓光寺

山城國愛宕郡一乘寺村

本寺舊在山城國南伏見里後移之于京師萬年山中至第二世時再移于今地下文詳之

開基

本寺係東照公開基慶長六年辛丑秋九月公相地于南伏見里建之徵足利學校校主三要為寺主令掌文教以擬畿内學校八年附以山城田二百石又賜活字數十萬個命印孔子家語武經七書貞觀政要等數部自創建之歲至寬政甲寅經一百九十三年

開山

開山第一世閑室和尚諱元信號三要肥前國小城郡晴氣村人  
多多良姓野邊田氏為大内氏庶族祝髮師金庭菊壯歲遊東國  
主足利學校東照公以學田百石附之世號為足利學校中興焉  
慶長五年庚子公與西軍戰于關原師以黑衣侍帷幄明年辛丑  
九月公以師為圓光寺開山第一世賜書籍二百部後命借京師  
萬年山相國寺地域移圓光寺又命管上國僧祝訴訟與京尹伊  
賀守板倉勝重連署行事既而建一院於駿府置師亦號圓光寺  
師常侍左右深被親信台德公亦善遇之曾賜年代記今為什寶  
肥前國主信濃守松平勝茂建立醫王山三岳禪寺於州之小城  
請師為開山第一世十七年壬子五月二十日寂于駿府壽六十  
五安牌於南禪寺自壬子至寬政甲寅經一百八十三年

第二世

第二世玉質宗樸源姓一色氏丹後人年十一入鹿苑西笑和尚  
會裡十六歲祝髮受度明年閑室和尚知其非凡器乞為弟子師  
研究内外典數歲不就寢席受蒲室口授于月溪山谷口訣于龍  
派慶長十七年壬子和尚寂師為法嗣住于本寺十九年甲寅三  
月九日東照公召五嶽諸老於駿城獻詩章師亦應召同賦焉時  
人稱為禪狀元台德公命賦早梅小春又承大猷公命詠秋日鶯  
後朝 後水尾上皇宮應制上題海棠黃蓮圖詩二首 上皇

覽而嘉賞之云師在京師居萬年山第一座兼拂元和七年辛酉  
賜景德等二帖先是京師有火本寺為焦土九年癸亥豐前國主  
越中守細川忠利捨淨財為再營資乃買山於一乘寺村小溪之  
側營構堂宇今所存即是也至寬永十四年建東照公塔碑焉十  
七年庚辰大猷公命師視篆相國寺自斯學侶加多法席益盛後  
有故謫居近江國小森其地係一色某采邑即中有壽城寺舊址  
師就建一字曰龜泉院曾遊湖上長命寺賦詩八篇世所傳近江  
八景詩是也居二十餘年遇赦歸京師復為圓光寺主僧寬文十  
一年辛亥六月五日寂距生天正十四年丙戌八十六歲

○予の師は行海法師の末裔にして、其の  
本姓の氏を掲げしむるを、其の師の  
行を以て師と稱するなり。予の師は、  
其の師の師と稱するなり。予の師は、  
其の師の師と稱するなり。

長門本平家物語

一 會員

平家物語の、我々文學史上に於ける位置、今更に論ずるまでも  
 なく、其原本多量の中上、特に大日本史に引用せられたる  
 名高き長門本を、同書刊行會より印行せられたる、實に  
 我々會員の感謝すべき所なり、之を往年公にせられたる  
 文學全集本と對比するに、其校正の良否に於ても、實に  
 たいりり、校正者の労を察するに、今更にあり、その文學  
 全集本に、あるべきの原文を、佛教の素養無き人が、強ち  
 漢字を入れたるが爲、殆ど讀むべからざる條、あるは、  
 のみならず、其の校正者諸氏の得意たるべき條、あるは、  
 ば、強ちを華擲袋とすたるが如きは、單に、つるもつ  
 のの誤とのみならず、ゆゑに、つるもつるも似たり、

刊行會は、校正の精しきならず、關根評議員の選録の  
 時代用と作者の弁を添へられたるは、幾多の會員を益す  
 こと、更なるものなり、  
 關根氏の考は、古今の説を引用し、批評し、又其上に  
 加ふるべき、殆ど主説とも見えず、その所から、平家物  
 語の兄弟とせしむる、源平盛衰記との關係を於ては、一言  
 せざるは、似たりし、ゆゑ、遺憾なきを祈る、既に、その水戸  
 の考考本のとき、今更に其問題を取り、尾崎氏の群書一覽等  
 二三の説を、夫に對する、氏の意見を聞くべきを得ず  
 るは、物たりぬ、地をす。  
 今更に、その書を、復して、中上巻の所、その多し、其  
 一二を述べ、その大なる、その多し、

並長  
本平

まが、盛家池の四十八巻有り、長門本平家ハ廿七巻有り、  
 流布本平家は十二巻とす、古人の説、平家は文を以て考  
 ら、盛家池は事考に於て詳有りといふは、動さずべしト  
 言ふものあり、平家を増補せるが、盛家池を、盛家池を  
 析出せざる平家なり、うは未決の問題なり、  
 余ハ盛家池を本とし、童謡家を末とす、後九祖す、其故  
 ハ、平家の文は流暢ナルも、往々意を極むるゝところ  
 有り、盛家池は並長の本は然らず

長門本平家の持門、天授の純友、康和の義親、平治の  
 信賴、各少のつと極事事セ、とりしること多かりけり  
 昔、はなも、瀬下、みかたは見えぬふたがいの、  
 かく

ゆゑ、  
 ちかかくなはたおとす平のこし

とす、文を盛家池、并十二巻本平家とは知りけり、  
 直まらまがらかしく、つとて、おりにけり、  
 へき、  
 とす、  
 あり、  
 あり、  
 あり、  
 あり、

盛家池の二、三、四巻は平家の一の巻、  
 九下平家の一の巻は十一、十二、十三の巻、  
 下平の巻、十七、十八、十九、二十、二十一の巻、  
 下平の巻、廿八、廿九、三十、卅一、卅二は七の巻、  
 下平の巻、三三、三三、三三、三三、三三、  
 下平の巻、三五、三六、三七、三八は九の巻、以下盛家池の  
 四巻と、平家一巻と相對し、注意す、  
 盛家池の

中廿一、廿二の三巻の中既に東国の合戦のとは十二巻本  
家系不始と無し長川本は江あり、これは二書の間係り  
つぎ之落後と云ふ点のあり、臨戎の事蹟は互利氏  
はぶらう、と有りて多く有難せあり、  
士巻本は其奥書より、一方校校衆の吟味を以て開物する  
ゆりゆり有りて、蓋し、かたり本、刊行し流布せり。一  
事考を以てしとせし。盛衰記長川本の原作者のありし  
かたり本は未きは何れも、長川本と、盛衰記との間  
はよりさへは、盛衰記の盛衰記並に事考物類別名世の  
ふりして、可なり  
故に巻数多や、一平家の本より、巻数ヤキ平家は抄本  
と見ふべきなり

選録の時代あつた、一、事考物類上の事考も、  
盛衰記、平家本、後鳥羽院の由を述べた。中  
配統の後は院を申し、又、後鳥羽院、平家本、  
と有り、後鳥羽院は、平家本、  
し、後鳥羽院、平家本、  
と申し、平家本、  
選録の時代をなす、平家本、  
流るるものなり

久志本者幸州村多梅の歌集も其の  
ニ其の古言を高くしし事ありて一書  
大なる所ありし一書をとり視て其の  
左の歌又とわ杉の鑑定も亦と添ふ  
十の<sup>一</sup>買入<sup>二</sup>三六<sup>三</sup>此の<sup>四</sup>記<sup>五</sup>の<sup>六</sup>故<sup>七</sup>居<sup>八</sup>を  
まゝ皮<sup>九</sup>に<sup>一〇</sup>載<sup>一一</sup>せ<sup>一二</sup>り<sup>一三</sup>と<sup>一四</sup>ま<sup>一五</sup>り<sup>一六</sup>て<sup>一七</sup>ん<sup>一八</sup>が  
者<sup>一九</sup>の<sup>二〇</sup>角<sup>二一</sup>の<sup>二二</sup>也<sup>二三</sup>は<sup>二四</sup>細<sup>二五</sup>を<sup>二六</sup>杉<sup>二七</sup>の<sup>二八</sup>解  
況<sup>二九</sup>を<sup>三〇</sup>も<sup>三一</sup>を<sup>三二</sup>略<sup>三三</sup>す

三十九年十一月二日

増一 河合氏十六の事 此本  
書者

孝徳天皇の御代文林館を設けし二年  
の七月に此の事あり

又その時士に杉抄命

梁御藤原室書者の古記にのれをていふ  
と云ふ所ありし事ありは  
藤原の御代に  
いへり上中の書ありしこの  
山きは御代に上書ありし  
片島の書ありし事あり





の並書といふ人は延暦十一年あたりに書きたり  
 也此六位上播磨大板成と興平山以迄  
 子侍るを記す事著せし集の以後は  
 長宿在入唐中<sub>の</sub>ありしつゝとんべんを  
 つらぬ大和の茶河幸の息巻吉といふ大  
 船長此年より似たりとんべん<sub>の</sub>りつゝ  
 宗朝室生上茅草とあるのいふこと  
 断定す  
 本生可<sub>の</sub>つらぬおぬ海潮<sub>の</sub>つらぬ  
去入いつらぬおぬ<sub>の</sub>時宿入<sub>の</sub>つらぬ  
せん

一丁のあむの後位あむし<sub>し</sub>此江の上茅  
 花より一掃少く入世<sub>の</sub>あむ  
 くらとまうらんといふ<sub>の</sub>いふ<sub>の</sub>  
 つらぬつらぬ蓋し具六<sub>の</sub>つらぬ  
 何の<sub>の</sub>つらぬつらぬ<sub>の</sub>つらぬ  
 三つ<sub>の</sub>つらぬつらぬ<sub>の</sub>つらぬ  
 此<sub>の</sub>つらぬつらぬ<sub>の</sub>つらぬ  
 のつらぬつらぬ<sub>の</sub>つらぬ  
 一<sub>の</sub>つらぬつらぬ<sub>の</sub>つらぬ  
 依<sub>の</sub>つらぬつらぬ<sub>の</sub>つらぬ  
 き<sub>の</sub>つらぬつらぬ<sub>の</sub>つらぬ

既元家... 遠極也

跋文

維神復景雲二年歲在戊申五月十三日

景申弟子譚奉為

先聖敬言一切經一部工夫之在者畢矣  
法師之轉溪盡為伏邪橋山之鳳輅  
向蓮傷而鳴空冷水之龍驟泛香出  
而留影遂披不測之了義永訖強  
高之法身遠既在存亡存亡周勳極同

首景福共甘沐禪流或麥桑田敬作

頌

非有能仁誰以二言不似法惟朕仰心給備

業權門利慶二言不似子板苦知力用妙

子登岸二言不似敬對二言不似此之歲月式垂二言不似

極之頌翰







Handwritten text in vertical columns on the right page, likely a signature or date.

○図書館

快

- 1- 1 刷本を補ひ得たとき、
- 2- 1 圖書寮宛の報に接したるとき、
- 3- 1 貴寮の圖書を償ふべく得たとき、
- 4- 1 他の圖書毀れたとき、圖書を得たとき、
- 5- 1 借取と新装の圖書の標題を考へるとき、
- 6- 1 教員と積りし贈言をも圖書の成りて  
しとき、
- 7- 1 新架の古を移すとき、
- 8- 1 陽地より久しく経る圖書の成り  
をせるとき、

- 9 - 関説高小満きれを止しなるとき
- 10 - 勝者終つて固者あり負者を捨し一考の不足なきをかり得なるとき
- 11 - 目錄編纂其他考證上一新法を二爪し得なるとき
- 12 - 固者蒐集の數一固年の編定も著しく増加するときは
- 13 - 重きを擧げたりし固者の中より既し佛の貴重なる古版を採るは名家の書入題後考をもるべき



○文久三年釋微定輯録する所の古經數條二卷版  
本多其半なり余一人く得んと欲しつゝ  
七果々々つ以て膠言せしめんとして里川の舟  
吉と借り一巻しつゝ、存る微定の自序と挿録  
し此の書の解題とす

凡披土本古經如覓至寶涉獵描撫萃義于  
梵漢經歷略記採汰于古今以備傳説以爲  
異聞亦古聖溫故之遺意也本邦古經約係  
隋唐以還之傳籍到今鉅利各盡雖之收存而  
然散缺殘缺無有蒐輯之者豈可不慨歎乎哉  
寛永中丰安城中庵良定上人討尋南都西京

清山之零本残篇以集成大藏经全部今收弃于寧  
 樂念佛寺者是也嘉永壬子之秋今西游投法法  
 山古任通得縱觀之其中有西魏陶作虎所書  
 菩薩懷胎經五卷唐慶節所書樓炭經一卷  
 最為其冠其他有本邦支那佛師公卿既且名儒  
 桐人所贈方經一千餘卷咸一千餘年以上物也  
 可謂希世珍寶矣於是余謂本邦之高于古籍  
 不讓西土也歐陽氏所稱也今南都一古刹其  
 存焉於此是通求法海內當獲大卷中八九  
 合歎頃日余抄錄諸名山經經造跋以備考  
 泐之資因紀實所寓自以教員事端爾

文久三年癸亥冬嘉平月題于佛眼山古經堂

○此乃經の蜀山集集と出取りて、高麗  
 先手ある事あり前記由唐より送る所  
 蜀山遺子の原巻合と併し、嘉永  
 寺の画の託る上巻と出取らん中より  
 目のこもの二三と掲ぐ

一 牛乳六白と懺 一 双

少名政用瑞午懺と日取山火の巻

一 画像 南岳巻

摩訶止持 自賛

一 杯を傾け 願、狂歌を題する

懐家形模倣

歌麿書

井筒いぬ

梅

昌山人書

花もりうそをまけをりて

ゆんころとたてくす

一 揮毫の控

あひまはる

あけ家前、揚げまゝ、あし

半家そぬ

一 花見画

一 俳俵の画

一

花

一 女の頭髪

一 一人

三 女つゝ

とあり

一 江戸車形方便品 顔面 古山

六十一

一 蓬花を飾り

とあり

とあり

とあり

まき

いんげん

まき

北の狂歌もさうして生草欄の同いさ  
日島さうことあけし  
いんげん忠僕に説をいささかんと  
ある島と山人をいささかんと  
いはいはいのいはいはいはいはい  
也

一 中傾石はる森なる左柳取のや 三柳取  
いささか

若きもあやうし  
外陳  
あやうし  
あやうし

松陰の他 四舟

あやうし  
あやうし

肉乳 蜀山 平入

あやうし  
あやうし

為人志をなすべし

自筆

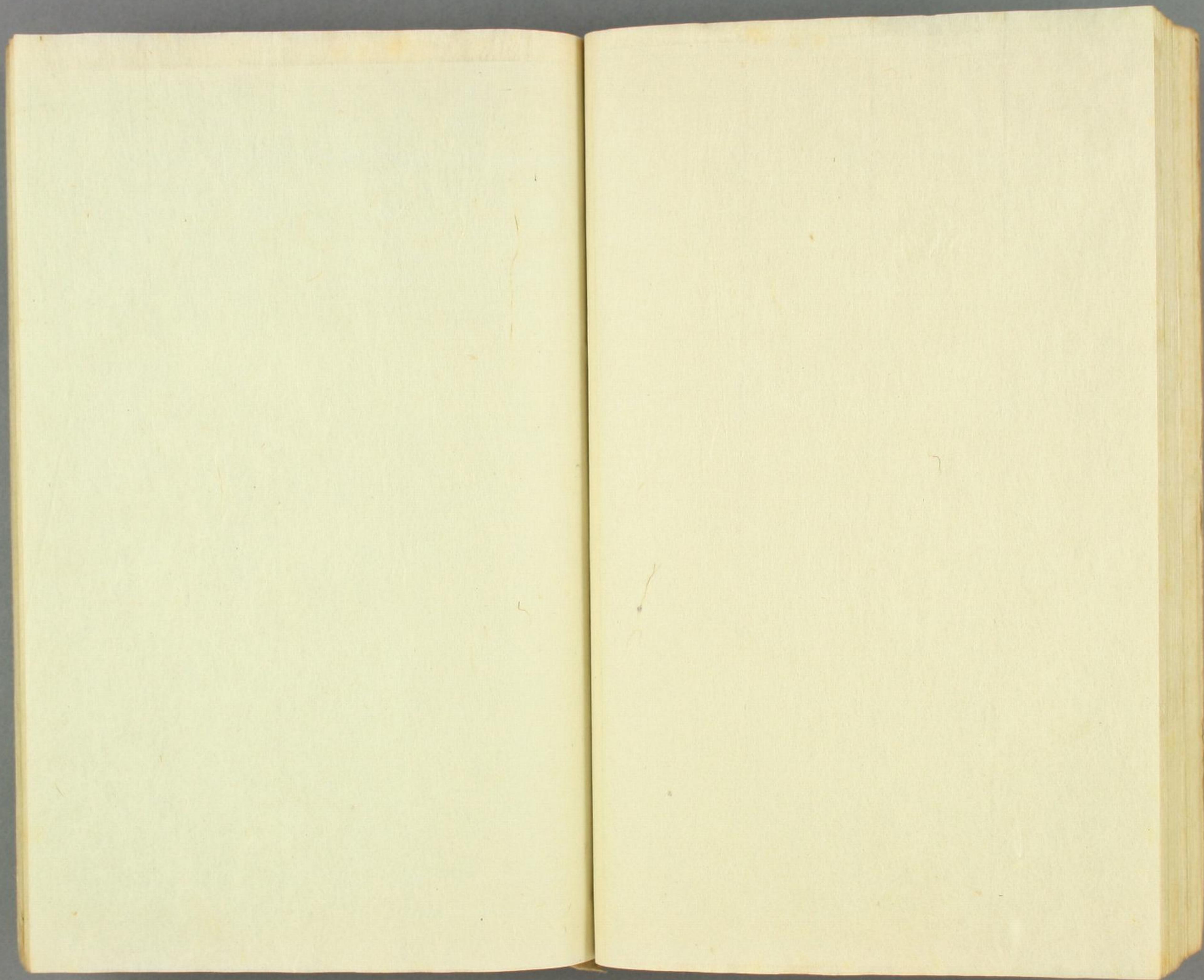
中川得揚宛

一 他行 あり

一 一沈一子 自筆 朝令の宛に於

節、世に教ふる徳あり十教を以て人  
の徳ありと傳へしに、いふよ、く、徳あり  
を以て之を、徳ありといふ、人のいふ、あ  
るが、此の徳あり、折角なり、~~これ~~ 及  
び、立りて、其の徳あり、いふ、し、る、あり

(この宛に十九年十二月十日記)

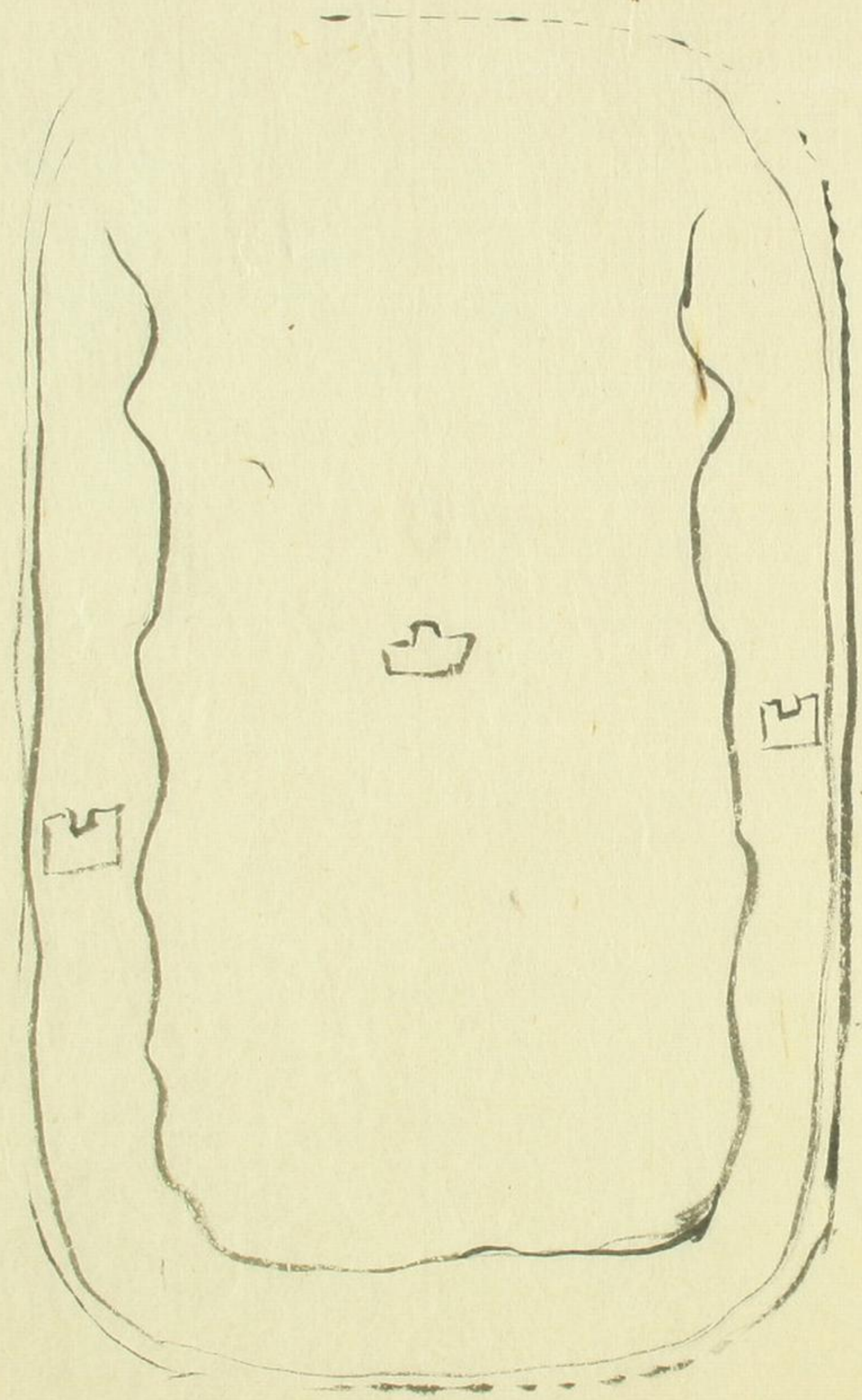


以下  
3丁  
白紙

一 日本古研

銘 淡路嶋 材 古高嶋

此は日本古研一而を獲たりし大板の四角と云  
ふ大さ約左圖のこころ厚のさ六寸許内圓  
縁漆を施し細波の蔭縁ありし中圓のこころ  
肌を周圍亦を隈々表の凸家嶋板を為す  
祝儀の起るより次々、蓋を桐材の縁漆を施し  
ても押入しし表に淡路嶋の三字を金も  
のりき、裏に字の銀泥をて左の目利を





續々群書類從歌文之部	和歌一	續々群書類從歌文之部
後撰集	片カナ本	二
古今六帖		六
新選六帖		四
拾遺六帖		二
現存和歌集		
續現存六帖		六
片岡山集	(釋教歌集)	
建久九年五月二日百番歌合		

古す

わさりの海

かきしし解さる

志ろをくは

あえろ 流るる 流ゆる

流るる

上へ通く町田石谷の懸坂あり

本邦古研以高嶋所考為第一他皆丑  
 之上代入墨之石谷所用者不外是  
 此研不易得宜寶貴之  
 辛卯夏  
 心金堂石谷親和志

承久元年九月七日日吉社 大宮歌合

承久元年九月七日日吉社 十禪師歌合

寶治元年百三十番歌合

撰五十首歌合 定家卿家隆卿

五十四番詩歌合 崇光院

康正内裏歌合 康正元年十二月廿三日

文明十三年十一月廿一日將軍家歌合

文明十四年九月廿八日詩歌合

秋十五番歌合 永祿元年八月廿三日

寬永十六年十月五日仙洞講合

一

慶安元年仙洞三十六番御講合 一

集外歌仙

歌仙家集補 富士谷成章

三

後柏原院御日次結題 校本

一

後水尾院御集

三

九條右大臣集

御堂関白集

平忠盛集

後徳大寺左大臣家集

大納言經信集

為家集

為世集

為明集

為定集

西三條稱名院殿集

今川氏真詠草

克孝家集

天正十六年聚樂亭御歌會集

文祿三年吉野山御會之御歌

惺窩先生倭歌集

三

二

學白集

細川幽齋家集

藤孝

五

烏丸光廣御家集

左京大夫義泰歌集

岩城々主

一

赤深衛門集

小馬命婦集

往事集

(井上通女)

顯註密勘

三十六人歌仙解難抄

和謠無底抄

基俊

十

三

八

臆

俊賴口傳集

清輔

五

和歌初學抄

清輔奧儀抄

三體和歌

結題百首

詠歌大概師談抄

今川了俊日記

東家歌道傳來書

細川幽齋詠歌聞書

溪雲問答

中院通茂答  
松井幸隆問

續無名抄

一時軒惟中

和歌物語

桂秋齋

續歌林良材集

長流

古今切紙口傳

古今和歌灌頂

能因歌枕

枕詞燭明抄

名数和歌集

新撰一字抄

後水尾院

和歌感應抄

雜

濱木綿 知清

和歌會作法

和歌合次第

和歌現在書目錄

和歌合略目錄

作者部類

續作者部類

新葉集作者部類

連歌二

連歌新式追加 二條良基

連歌

連歌至寶集 里村紹巴

連歌初心抄 一

連歌式目歌時代考 山崎宗鑑

連歌答問 一

鷹連歌 一

物語三

後水尾帝御講釋伊勢物語 二

正三位物語 岩清水物語

苔衣

日記四

物語

一月二十九年十二月十日  
珠珀園  
梅木仁右衛門の遣る荒干  
出立の物と通報に接し、  
其品を曰く佐幸  
物、曰く金名揚本曰く心食院  
影射之者、曰く古株、皆等、  
七、谷易、之獲べり、  
其の金の  
拵動く即ち二る田を投し、  
其品目少左、

一奈良十合株

一個

株の一連二

奈良十合株

他の一連二

此言不可誤

天正十一年潤正月廿日

未

と刻しあり

一宣旨景 五合株

唐子

唐丸

二十四年



と刻しあり即唐丸の印

唐丸の宛来せんやと云ふ

縁の竹と篠の筒子の並み代

田しる器あり

一古一合株

と刻しあり

古も挿あり

寛永五年の事

一 斗 檜

添物と曰く

竹を以つて作る。長三寸七分、  
建久三年の四月と刻す。

此斗檜は建久三年造るものにして、  
七寸弱ありし本年七月奈良長高住の手よ  
り出せしものも、檜は春の具備す  
に傳へしものも、但し、此斗檜を  
用し、竹を以つて作るも、や、切り難  
けん、此は寛永の宣令、斗檜に用を  
し、  
方斗檜は、由方四寸深サ二寸五分、  
法、四寸七分弱、  
長三寸七分、

斗檜の長三寸二分

容量、斗檜、  
振方、

斗檜、建久四年三月の事、  
斗檜、定云、白米、三斗、  
斗檜、定云、白米、三斗、  
斗檜、定云、白米、三斗、

一 撲道古株

一 古 昔 株 山 科 株

方曲尺四寸九分 深二寸二分  
主根五十二寸八分 二寸二分  
容量、斗檜、八合、  
斗檜、八合、  
斗檜、八合、



此等天正前の通商外容量を有るは十斤  
に因し大化大寶の大升と較するは  
二升と云ん

二 大寶前大量

方四寸五分 深二寸五分  
天平尺四十寸零五分

改申要略所謂今前大升則是容量字  
升五合八勺四撮四抄有奇

三 大化大寶大量

方四寸 深一寸七分半

三積天平尺二十八寸

唐大量改申要略所謂減大升別是  
容量今升四合零五撮八抄有奇

四 大寶前小量

方三寸 深一寸五分 三積天平尺十三寸  
五百分

當大量三分之一  
容量今升一合九勺四撮八抄

五 大化 大寶 小量 康小量

方二寸五分 深一寸五分  
三積天平尺九寸三分七十五分  
當大量三分之一

容を今升一合三勺五撮二あり

六 和銅十合号

方四寸五分深二寸 和銅大尺定

容京升五合八勺四撮四あり

〇七 印書

二枚

楊木改矩造るの中より一の日本古印紙  
あとも多くは暮ししるうらみも暮し古摺  
めを可なり則ち匡きよの九十紙を挿し  
之を印書本に物の懸しん古印書あり

京思のふ此の古印の暮本と改矩印  
史と上木ちんしん茶めしよの敷余  
凡印史と見が且し記しん他は何の  
ま

〇 金石文抄本 相箱二個

身衣色紙唐代所製の記あり  
又不忍文庫の存印を挿し  
このまゝし又青堂又存(持者  
板高勲者印)の存印ありよ  
をも文也、想ふよ此の二個の古

類々悉く屋代の無かきし  
 後●柏木の中心の物●  
 今方左の中の見取と  
 揚し、但し零細さの目の洋  
 うさささ、さのささ

- 一 元以帝猶山浄法年人係 一袋
- 一 宇沉橋断碑 一柏
- 一 東寺什物古林接奉 二
- 一 紀州。古川道林寺鐘銘 三十四年 二
- 一 道海寺鐘銘

● 法隆寺金部

- 一 藥師佛後燭銘 推五十五年 三
- 一 日蓮也又平後燭銘 三十五年 二
- 一 彌陀三尊後燭銘 三十五年 一
- 一 文祚磨墓記 七十四
- 一 日光山鐘銘
- 一 中祿寺金部
- 一 足利寺末版文邊跋尾
- 一 漢石經墓本

一奉天勅命

一勅命守乃等施入修文錄云有四

一造菩薩觀文才公等所存七行

一衛夫人无白

一元亨并中轴之精感寺

一慈眼大师寺

一平康寺

一佛及八陽龍寺等一切經內

順正記論跋文

一曰廣弘明教文

一八駿圖

一唐法相圖切注象

一佛冠石碑一式 一袋

一興福寺中

觀音院 鐘銘  
神名經年古

一 華師寺東塔擦銀 文武天皇二 二板

一 法隆寺金毛天王木像後燭銀

一 東大寺聖武帝法者銅板銀 天智

一 惟船氏銀墓誌 天智七年

一 感素少墓碑 天智四年

一 大和國栗原寺塔覆盤銀 和銅

一 大和竹野王碑 天智勝安三

一 法隆寺 遺麻布觀音像守緣銀

一 鳥居枚人墓誌

一 東井院新碑

一 古靴

一 阿彌陀丸木車鐫銀 貞永元

一 大魚骨笏

一 池邊大宮 銀

一 年人石 なる北佐保山に在る

一 三五の銀古字本 影言本

他略す

一 影言本

一画

古文書 名家の筆蹟を影言  
せしもの 百とを記し一千枚  
皆近代の買入の自筆 影言に  
係る 不思議の印を捺  
す。このまゝし

一 正倉院御物振本

二十餘巻

らんを栢木撰古物振本と云ふし  
此の本の殊  
に貴重なるものありて傳を  
載せ下筆する其の大ききもの  
其の凹凸  
等を指ししる例は此の  
きり矢のこま、ゆたきおの  
こしき小巻、ふらふら、  
ありて振本、又衣袍の  
振本下筆

ふれきしと又の十人をもとに記す  
異物の外古文書數十冊ありて此  
月拾巻中の葉ありとて取合ふるべ  
ざる所此の一冊の拾巻珠と稱し  
まじし

・ 拾巻物

二十箇巻

豊後文庫 住三江又三庫 田五  
圖書記 尋の巻古印と拾巻

此の拾巻物の十中七八は校合書確  
の言まじしものなり也其の記さるる  
ものも校合の舊紙より他人をして  
拾物録に存仕りしもの此種の  
類も亦一拾巻末の手する物也  
リ  
今右の目録を掲ぐとす

一 觀音念佛緣起經 版本 二

一 小石七かき 或云灌頂書 一  
初後系抄加 爲仁主法眼

一 位貴山縁起 詞 畫 行 歌 三  
詞 畫 行 成

一 去谷雄山書 一

一 百鬼抄 卷 行 秀 詞 一

一 車大寺山合流 寶 詞 一

一 源氏物語 一

一 鳳雛 一

一 古代輕容 一

一 伴大納言傳詞 三

一 十天 聖不動明王林八局 一  
方山寺 什

一 新墨抄習 詞 畫 行 歌 一  
詞 畫 行 成

一 腰刀之圖 一



一 異病苦家

一 注不動保起

一 建保觀人形令

一 文政年分夏強聽了回

一 進加觀人畫 土俗克化

一 多羽保正保事

一 八花紙亦鏡事

一 外遊事

四

一 清海公像

一 抄

一 大風冠上像

一 抄

一 清和帝淵政原介

一 抄

信長公家又廣也

一 後白河法皇御影

一 抄

一 石塚合本寺子内

一 年中行事

一 騎射之印

一

着跡返

香印、  
清涼殿の圓馬の

周白加賀詣

齋会

御齋会才

平中祭(圓)

中殿御会(圓)

朝觀行寺

六月被寺

五(圓)

献葛蒲(圓)

一 異行本茂祭

一 湯布物作

一 古代物祀献立(三)

一 打撲(圓)

一 七十一番(三)

一 本大寺正合院(圓)

一 聖天帳圖

一 法隆寺變物圖

一 依木高岡

外敷名方係

一 多羽作心傳

一 弘安年間大江寺修書

一 天正年間古文書

一 貞觀古方紙

所謂の麻紙  
全り通る更紙

一

三

一 概

二 卷

四

一 卷

一

此州正光寺什

一 外雜書

右唐檄中一あり

七

以上

○此の早稲の園者彼のあつた白石自草本二部と  
購ふべき論終一と説部を在るニ書く何れも  
板草一とありし白石。書名を記しあつた  
論終五とあり。説部二十とあり。并論由之と  
述年一書草を記し論終得るを記し白石の論  
こととあり。論終五とあり。弘文館の刊の  
るに記し白石の論終論終外一とあり。並論由之  
と此終の草本四とあり。是とあり。これとあり  
其由の論終五とあり。并論由之とあり。論終  
七とあり。白石の論終五とあり。論終外一とあり  
論終五とあり。並論由之とあり。論終外一とあり

廿七の九の...  
 一の四十年一月...  
 ( )

の武州...  
 の事...  
 の事...  
 の事...  
 の事...  
 の事...

武蔵國比企郡平村慈光寺古寫経筆者目録

一品経書寫沙券

- 序品 法行
- 譬喩品 仁和寺法印
- 蓮草品 別当僧正
- 化城喩品 禪林寺法印
- 人記品 法性寺大僧正
- 寶塔品 十學院僧正
- 勸持品 如意法師
- 涌出品 太政入道
- 分別功德品 法性寺殿
- 失方便品 五條大僧正
- 信解品 宣統門院
- 授記品 母高院僧正
- 五百弟子品 左大臣
- 法師品 禪林寺法印
- 提婆品 吉祥庵前
- 失安樂行品 大原僧正
- 壽量品 二位殿
- 隨喜功德品 法性寺法印

法師功德品 九條殿  
 神力品 東光院法印  
 藥王品 萱殿  
 觀音品 東序方  
 嚴王品 於々、  
 普賢經 寶壽院宮  
 阿耨陀經 姪君

負數參拾貳卷

文永七年十一月廿日

註之

不輕品 持明院大納言  
 囑累品 春日殿  
 妙香品 嵯峨入道  
 陀羅尼品 大魚法印  
 勸度品 幸法前  
 無量義經 芝上修都  
 般若心經 坂川大納言

一品經補書之次第

方便品 伏見邦親親王之妹田鶴宮  
 藥草喻品 前大覺寺大樂心院  
 安樂行品 德川中納言宇武卿之女脩姫  
 分別功德品 近衛右大臣延一住經無公  
 妙香品 德川中納言宇武卿之女定姫  
 勸度品 伊豫丹松山侍尾源定國

寛政二庚戌年八月

弘文館に唐人書集を出版せんを以て  
 元を在りてすやまき夏帖を見ざるを極  
 りを秘し其の地をすこしは友とす

春夏帖見本

五月廿

之よりわおつし二日の書を  
 みものかきしんもくしん  
 つらりりりりりりりりりり  
 人の心海深の心のまか  
 部くかかかかかかかかか  
 ちしししししししししししし  
 子しししししししししししし

あつたがらふもあらまじきと

あつたがらふもあらまじきと

あつたがらふもあらまじきと

あつたがらふもあらまじきと

あつたがらふもあらまじきと

あつたがらふもあらまじきと

あつたがらふもあらまじきと

あつたがらふもあらまじきと

あつたがらふもあらまじきと

あつたがらふもあらまじきと

あつたがらふもあらまじきと

あつたがらふもあらまじきと

あつたがらふもあらまじきと

あつたがらふもあらまじきと

あつたがらふもあらまじきと

あつたがらふもあらまじきと





しつらねる。しつらね

あつらねる

あつらねる。あつらねる

あつらねる。あつらねる

あつらねる

○寺田所記の如くは、  
と云ふる。其れ亦自ら書きたるを罪ん  
行のふ十行。且た其のふ十字。其れは  
石の書きたるは、其れ亦自ら書きたるを  
其の性、其れは、其れ亦自ら書きたるを  
ふ十行と云ふ。其れ亦自ら書きたるを  
印し、其れは、其れ亦自ら書きたるを

○併に先哲書録と漢書史の関するものあり  
即ち二三を抄す

一見林泉日本傳也、漢烏貢始設和夷底績  
之為我邦、自是而降、自漢晋歷代之法史

至元明衆家之書說。有及我邦者。一言半句。無不  
收載。今而觀之。非無遺漏。其博涉之旨。可謂勤  
矣。近時若山本北山異稱日本外史三萬六千四百  
尾崎灌月傳異稱日本傳三萬三千七百七。增  
鳴澗水異稱日本事六萬五千。周部菊涯  
異稱日本外史拾遺一萬六千四百。各有所見。  
是以資考。雖然。皆足待見林而興志  
也。松下見林傳

一 若水以博物聞於當時。海內言本州者。盡歸嚮  
焉。及之。嘗著庶物類彙一千七百六十五。其  
未嘗有大手筆也。於此果為之序云云。曰。日

尊。不供。凡歷二十稔。屢易稿。今為二十三部  
計二千六百餘種。皆係我土域所產。殖焉。其中  
四卷而。不彙此者。當俟他日。別錄之。於是  
書成。總一千七百六十五。曰庶物類彙云云。

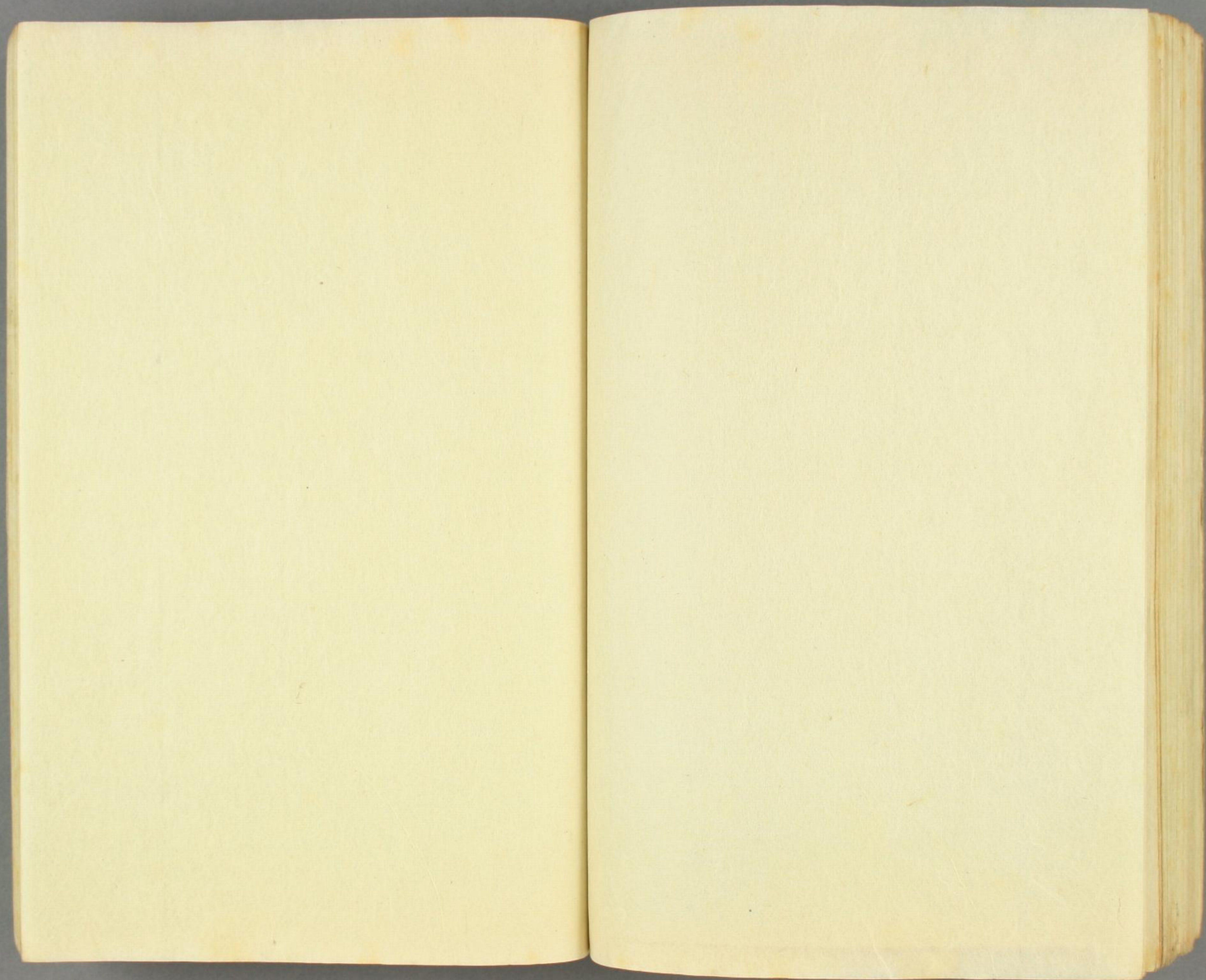
一 若水云。所收舊書。凡十二萬卷。所起草  
稿本三十六種。遺亡悉收之。金澤之候府。亦  
欲後人之觀。故不生之所鈔。皆至今。現存  
不數佚一篇。矣。以上二件。稻生若水傳

一 若水嘗以其壯年所校刻本。若干細目多  
致誤。誤欲改刻之。而不果。亦建波藩府。將  
翻刻。萬曆版二十一史。施回後於全部。

至宋史、未至於完位、而謝世、後為惜之全上  
一寬言以享保八年癸卯五月三日病歿外舅  
北川氏宅、歲四十五、友人山本後高、與汝門  
人亦謀、錄其平生所著記、編次為十卷、  
曰茶林子談錄、我土儒家有語錄始于此、  
云、中河寬有

注 按近人云釋氏語錄始於李唐、儒家  
語錄始於趙宋、儒其行而釋其言、  
非所以垂教也、故以汝林子為宋儒  
語錄、釋氏之名稱、然唐書舊唐書志  
史部載孔思尚宋齊語錄十卷、

此語錄字號見於此、不必始於此、彼  
釋氏、記錄之書、謂之汝林子、舊矣



以下全て

白紙

明治三十九年  
十一月下浣

春城陳人